からだで
おぼえたものは
はなれない

サトウハチロー

なれない仕事で
涙ぐむと
母の瞳が浮ぶ
力のいる仕事で
へたばると
父の笑顔が見える
われとわが身を
はげましても
情けなさがあふれてきて
あたりの風景に
もやをかける

のりこえろ　のりこえろ
からだでおぼえたものは
からだからはなれない
はなれない

手でおぼえる
足でさとる
目にやきつける
胸にしみこます

ボーイスカウトの仕事は
すべてこれだ　これなんだ

水くみひとつにも
上手下手がある
米をとぐのも
めしをたくのも
玉ねぎをきざむのも
ジャガ芋の皮をむくのも

遊び半分では
出来ない　出来ない

手でおぼえる
足でさとる
目にやきつける
胸にしみこます

満足に
つとめを果した夜の
キャンプファイヤーの火はすばらしい
静かにじっと眺めていると
さわやかな
ほんとうに　さわやかな虫の声が
首にしみこむ背なかにしみ通る

NHKTV.「十代は君たちのもの」において8月24日、放送されたものを、ここに掲載いたしました。

1966.7~12

ウッドクラフトとは

中　村　　知

研修資料　スカウティング誌 昭和41年7月～12月より

PRINTED by PEOPRINT

ウッドクラフトとは

―― その 1 ――

中　村　　知

序　　説

1．ウッドクラフトとは何か？
2．これはだれによって創始されたか？
3．シートンとケファートとベーデン・パウエルのウッドクラフトは、どうつながるか？
4．スカウティングの構成上、ウッドクラフトは、どのような部位に、どのくらいのウエイトを占めているか？
5．ベーデン・パウエルは、それをどう展開させようとしたか？　すなわち技術以上のものに。
6．進歩制度からみたウッドクラフトの諸段階の配分はどうなっているか？

など、

以上は、私の長年の研究課題である。シートンとかケファートの名前を知ったのは、今を去る40年前の1925年ごろのことで、故佐野常羽先生から、シートンのことを、故中野忠八先生や、山口季次郎先達からはケファートについて教えられた。それ以来、ウッドクラフトというものを研究したいと思い続けて今日に至った。

これは私の、あさはかな見方かも知れないが、今の若いリーダーの人々は、シートンだの、ケファートというような有名な人名さえ知らないようである。そんなものは知らなくても、隊長はつとまるし、コミッショナーもつとまる。そういう世の中になったのかもしれぬ。

けれども、"Scouting for Boys" だの "Rovering to Success" だのを、基本的に読んで、その原理をつかもうとするならば、どうしても、シートンや、ケファートが長年かけてあるいてきた足跡を、一目でも見ておかないことには、ほんとうの理解はできないし、その、含蓄のある味は、わからない。

私は、かつて、相当、素養のあるリーダーが、このウッドクラフトという語を、木工とか手技というように解釈しているらしいのをきいて、あきれたことがある。なるほど Wood は木材であり Craft は技術ということだから木工または、木彫り、と解されぬことはない。その人が、もし、そう信じているのであれば、まことに、お気の毒であるが、やはり基本的な勉強がたりないと申しあげざるを得ない。

私は、目下、スカウティングと宗教との関係を勉強中である。その宗教――とは、既成宗教とか、特定宗教をさすのでなく、汎宗教をさすのであり、通宗教を意味するのであるが、この宗教と、スカウティングとを1本に結びつける中間子（媒体）となるものが、きっと、あるにちがいない、と考えて、数種のものを想定しているが、その数種の中のいちばん大きな素粒子が、いまいうウッドクラフトだということに今、している。

そういう時点からも私は、ここで一応、ウッドクラ

フトについての研究をまとめておきたい。

この作業のために読んだ文献は次のとおりである。

(1) Earnest Tompson Seton 著
"The Book of Woodcraft and Indian Lore"
1917年版 p. 567.（初版は 1912年）
London. Constable & Co., Ltd. 発行
この本は、10年にわたり "Birch-Bark Roll"（樺の皮の巻物）に載せた文を集大成したもので自分がキャンプで実験した事柄を記したという。それは彼の少年時代からの作業だともいう。

(2) Horace Kephart 著
"Camping and Woodcraft"
Vol. Ⅰ. Camping p. 405 1919年版
（初版は 1916年）
Vol. Ⅱ. Woodcraft p. 479 1920年版
（初版は 1917年）
別名—— "Handbook for Vocation Campers and for Travellers in the Wilderness." ともに New York. The Macmillian Co., Ltd. 発行
この本は2巻本と合本物とある。私が読んだのは中野忠八先生蔵書の2巻本で那須野営場に現在保管されている。ケファートは米国カロライナ州の山中で 1904～6年、本格的にウッドクラフトを自修して本書を書いたという。専門的野営家と荒野旅行家用のハンドブックとして書いたという。日本では旧鉄道省編として大正15年6月、「キャムピングの仕方と其場所」と題する本を実業之日本社から発行したが、その内容はこのケファートの本から主として抄訳したもので、故佐野先生の助言を得て茂木鎮雄氏が筆をとった。口絵の中に日光戦場ケ原雨中ハイク（佐野伯寄贈）琵琶湖雄松岬の野営の食器洗い（中野忠八氏寄贈）およびギルウェルのログキャビンの写真がのっているのはなつかしい。

(3) J. G. Cone 著二つ
"Make and Do the Woodcraft Way"
p. 122 1963年版（1940年初版）
"Woodcraft Wisdom" p. 121 1960年版
（1952年初版）
ともに London. C. Arthur. Peason Co., Ltd. 発行
この本は、スカウト用のウッドクラフトに限定した入門書と資料書である。挿絵豊富。日本にはこういう本がないので、スカウトもリーダーも、ウッドクラフトの妙味を知らないのではあるまいか？

(4) ベーデン・パウエル著
"Scouting for Boys"
特に、1908年版（1957年復刊本）と 1910 年版（1910年版は私の恩師故北条時敬先生が、1910年に英国からとりよせ日本青年館に寄贈されたものを、日本青年館から私が借用中）

(5) William Hillcourt, Olave Lady Baden-Powell 共著
"Baden-Powell"
(The Two Lives of a Hero)
p. 457 1964年初版本
London. Heinmann 社発行
特に本書にあるベーデン・パウエルとシートンとの交渉の部分は必読。

(6) Baden-Powell 著
"Rovering to Success"
1963年，1964年版（初版は1922年）
特に、"Open air" についての部分
美と驚異についての部分
無宗教の部分

(7) その他
○東洋的、日本的修験に関するもの
○ルソー著「エミール」のある部分(岩波新書版)
○内山賢次訳「シートン自叙伝」1941年白楊社発行
○ Dan Beard の伝記（"Encyclopedia Americana" から）

ウッドクラフト とは何か？

英和辞典で、Woodcraft をひくと、
森林（山）の知識（特に狩猟についての）
森林学、木彫り、木彫り術
という訳が出ている。

ところが、実は、以上のものをふくめた、ひじょうに広範な森林生活法なのである。木樵法もあれば測地法もあるし、追跡、忍び寄り、読地図、方位判定、結索、縛材、開拓術、架橋、動物、植物、鉱物、天文、野営法など、われわれが通常スカウト技術といっているもののすべてをふくみ、スカウトとしては手の及ばない高度の専門的技術までふくめている。探検術もある。そして単なる知識にとどまらない。

この Woodcraft に、広義と狭義の二つがある。広義とは、Camping をもふくめたもので、前記のシートンはこのほうをとる。狭義というのは Camping と Woodcraft を別々にしたものでケファートはこの2本立てのほうをとっている。いってみれば、このほうが分科的でくわしいということになろう。

どちらにしても、ウッドクラフトというものは野外生活法なのである。

いったい、どのような内容をもつものかということが、私の第1の興味であった。そのため、たいへん、やっかいだが、どんなものをふくめているかを、シートン式とケファート式から、ひろってみよう。

シートン方式

ウッドクラフトの17章として、

第1章 スカウティングの原理
第2章 西部の勇者（インディアン）
第3章 ウッドクラフト、インディアンの目的と規約
第4章 Honor と Degree
Red Honor（英雄心、騎乗、陸上水上競技、登山、狩）
White Honor（野営法、偵察、弓術釣魚）
Blue Honor（自然研究、写真術）
Degree 23細目あり（技能章的）
第5章 歌、踊り、セレモニー
第6章 プログラムのたて方
第7章 室内スカウティング
第8章 戸外スカウティング
第9章 信号とインディアンのサイン
第10章 野営術、夏期野営
第11章 キャンプのゲーム
第12章 健康と林中医術（実にくわしい）
第13章 博物学
第14章 キノコ類
第15章 森林
第16章 インディアン風俗
第17章 営火夜話 インディアン名酋長伝

という構成である。以上は "The Book of Woodcraft and Indian Lore" という前記の本の目次の写しであるが、これによってどんな事項をふくめているかおおよその見当はつくであろう。

ここで注意すべきことは "Scouting" という語を用いている点である。この本の初版は1912年であり、そのころ、シートンはボーイスカウト米国連盟初代の総長だったので、彼が創始した「ウッドクラフト・インディアン団」はボーイスカウトに合流していた。それだから、スカウトとかスカウティングという語を用いたと考えられる。そう思うと、シートンのは、インディアンごっことスカウティングの2本立てということになる。

この本の第2章西部の勇者——の章にインディアンの信条というのが載っている。それは、謙虚、清潔、清純、勇敢、節約と用意、快活明朗、服従、親切、厚遇、婦人への態度、礼儀、正直、信頼と名誉、節制と節酒、体格の15徳目をあげているが、これはスカウトのおきて12箇条の逆順でそれに三つ加えた形になっている。これは、ウッドクラフト・インディアン団のおきてが、米国ボーイスカウトのおきてになったのか、逆に、米国ボーイスカウトのおきてが、シートンのウッドクラフト・インディアン団（後のウッドクラフトリーグ）のおきてになったのか、はっきりしないが、シートンはインディアンのおきてのほうが米国ボーイスカウトのおきてになったかのように、インディアンそのものをたいへん模範としている。

彼は、この本の巻頭に——

○この本は私の25年間にわたる講演を集成したものである。
○その大部分は "Birch-Bark Roll" にのせたものでこれは10年間にわたり毎年刊行した。
○自分のキャンプにおいて行なった作業と習俗と、おきて（Low）と娯楽についてわかりやすく書いた最初の本である。
○実験した主題の中には、別の本にせねばならないような大きなものもある。たとえば——
- Life Histories of Nothern Animals
- Animal Stories
- Sign Language
- Forestry

○ウッドクラフトというものは Manhood（男性作り）の学校である。
○私は Woodcraft という語を——戸外生活を通じてセンス（sense）と、プラン（plan）をこの中に broadest（包摂）するものと少年時代から考えて

きた。

○人類を獣的要素からとり出し救うものは Woodcraft である。

○Woodcraft は何よりもまず第1に、科学への入口である。

○Woodcraft のその高度なものは人類をその堕落から救う。

○私は、戸外生活のモデルとしてインディアンのウッドクラフトをとりあげたのである。

と、記している。

"Birch-Bark Roll" (樺の樹皮の巻物) という年刊誌の名前は、故佐野先生の講義で幾度もうかがったのであるが、それがこの本に収録されているのだから見のがせない。

私は、ここいらで、シートンの少年時代からの略伝を述べねばならなくなる。

シートンの略歴
(Earnest Tompson Seton)

○元来は Earnest Seton Tompson だった。

○1860年8月14日、英国 Durham の South Shields の船主の、14人兄弟の12番目として生まれた。代々スコットランド人系に属す。5才の頃父が商売に失敗し一家はカナダに移住。幼年のシートンはカナダの風雪とジャングルの中に人間形成をする。一時胸の病に冒され闘病。彼のウッドクラフトのスタートである。6才から狩をした。国境生活、開拓者生活そのうちに「動物記」を後世に残す土台ができた。12才のとき、芸術家になろうとした。トロントに移ってからも、野生生活をすてなかった。彼は博物学者になりたいのだが、父は画家にしようとした。16才、画家の卵となる。19才のときロンドンに行き絵の勉強をする。実は父にだまって博物学をやるのが目的、皇太子とカンタベリー大僧正と、総理大臣ビーコンズフィールド卿に直接面会して、大英博物館の特別図書室入室の推薦をさせた話は有名である。後、パリで絵の勉強をする。が、彼が1880年、ローヤル・アカデミー絵画彫刻学校の奨学生に選ばれたことはうれしかった。実は、これはロンドン動物園無料入場の特権を伴っていたからで、そのほうがうれしかった。ロンドンでの生活はひどい貧乏ぐらしであった。彼は大英博物館の特別図書室で博物学を自学する一方、動物園で動物の絵をかき続けた。

有名な「動物記」の初版は1898年で、彼の38才のときである。アメリカに永住することになり、青少年運動にタッチする。——すなわち、

○1902年、"Woodcraft Indian" という団をおこした。後年、これは Woodcraft League of America" となった。

○けれども彼の自叙伝によると1874年、彼の14才のときすでに、自分で"インディアン部族" という名の団を作っている。あとでこれは、"ロビンフッド団" と改称した。

○1910年2月8日、ボーイスカウト米国連盟 (Boy Scouts of America) が結成されたとき、シートンの 300余団もあった。Woodcraft Indian 団はこれに合流した。そしてシートンは、最初の総長 Chief Scout となった。時に50才。ところが、1915年、彼は総長を辞任して、Woodcraft League のほうへ戻った。その理由はよくわからないがたぶん、Indian ごっこのほうが、すきだったからと思われる。あとで記すが、シートンは、ベーデン・パウエルに、インディアンごっこを英国でも盛んにしてほしいとたのんだことがある。けれども、英国ではうけいれられなかった。(Hillcourt 氏著 "Baden-Powell")

○この1910年、米国連盟設立のときシートンを助けた人が Dan Beard で、彼はシートンより 10 年年長 (1850年6月21日生) だったが National Commissioner として、1941年6月11日、91才で死ぬまで、米国連盟に奉仕した。この人の略伝は後記する。

○シートンはカウボーイをしたことがあり、あのヤクザ者みたいなカウボーイどもが実は母親をたいせつにするのに驚いた。それがもとで彼は家庭婦人雑誌に執筆してインディアンをほめて書いたし、講演もした。彼は講演を年間100回ぐらいし、鳥獣画も描き、文筆にも達者、まことに精力無比、奇人肌でもあった。

○シートンは、1946年、10月23日、ニューメキシコのサンタ・フエで86才で亡くなった。死ぬ前日まで元気で、自分で屋根にのぼって修理したという。

○著書は、たくさんあるが有名なのは——

- Wild Animals I Have Known (1898年後1942年改訂) つまり「動物記」
- The Trail of an Artist-Naturalist (1940) つまり彼の自叙伝。挿絵豊富

(これにくらべると Horace Kephart のウッドクラフトは、だいぶ性格がちがう) —つづく—

(日本連盟嘱託)

ウッドクラフトとは

—— その 2 ——

中村　知

ダン・ベアードについて

この稿の予定では、ここで Kephart のウッドクラフトについて書くつもりであったが、はからずも、シートンと協働したダン・ベアードの事蹟について調べていた中間報告ができたので、このほうをさきにする。

ダン・ベアードの本名は Daniel Carter Beard である。これを Dan Beard というのは略称なのだが実は愛称でもある。それほど彼は、全米の少年から敬愛された。有名な雑誌 "Boys' Life" は彼によって創刊されたといってもよい。彼は、その雑誌に、すばらしい動物のさし絵をのせ、かつ、パイオニア精神をもりあげる文を書いた。しんからの Boy-man だったからである。

アメリカ発行の百科全書 "Encyclopedia Americana" の1963年版の Vol.3 の 380 ページによると——

米国人にして画家、著作家そしてボーイスカウトのリーダーだと記している。

- 1850年6月21日、シンシナティーのオハイオに生まれた。
- 1941年6月11日、ニューヨーク州サファーンで死す。行年91才。
- 画家 James Henry Beard の息子。
- ケンタッキー州カービントンにて教育をうけてからニューヨーク市 Art Students League で画を学ぶ。(1880～1884)
- 1900年には著述家ならびに画家として全米的に名をあげる。
- 有名な著書は、"American Boys' Handy Book" (1882年)
- 数種の全国的雑誌に執筆したり油絵をかく。Mark Twain の小説のさし絵も。
- 1893～1900年、婦人学校のデザイン科という雑誌のさし絵家となる。
- 世界最初の動物画家の組織を作り会長になるよう望まれた。
- 1905年 "Sons of Daniel Boone" という名称の、少年パイオニア団をおこす。これは "Fort" (とりで) と名づけるクラブ組織によるもので全米に普及した。
- 1910年2月8日、ボーイスカウト米国連盟を創立し (National Scout Commissioner (総コミッショナー) となり1941年死ぬまで奉仕した。(これは60才から91才までというわけ)
- 全米のスカウトから "Uncle Dan" とよばれた。Golden Eagle 章をもらったのは、この人だけである。
- アラスカのマッキンレー山の山頂が Mount Beard と命名されたのは、この人の名誉を永久に残すためである。

。著書として
"American Boys' Book of Wild Animals" (1921年)
"Wisdom of the Woods. (1927)
',American Boys' Book of Camp - lore and Woodcraft" (1936)
自叙伝として1939年に書いた
"Hardly a Man Is now Alive" がある。

以上は百科全書からの抜き書である。

私は終戦直後のある時期、英国の技能章の翻訳をしたことがあるが、開拓章だったか何かの解説書の巻末にダン・ベアードのことが載っていた。その原本も訳稿も盗難にあって今手元にないが、私の記憶はある一点で今でも鮮明である。それは――1861～65年の南北戦争のとき、南部の司令官は南軍の軍旗の図柄を募集した。その懸賞募集にめでたく当選した人物がいる。その授賞式は盛大だったが、名を呼ばれた瞬間、満場の群衆は、立ちあがって、どんな人物が当選したのだろうか、と首を伸ばしたが、いっこうにその人物は見えない。ただ、小きざみに、コトコトコトという靴音ばかりがひびいた。そのうちその人物は高い壇上にのぼって、ぴょこんと、おじぎをした。なんだ、コドモか！　と、叫ぶ声とともに嵐のごとき拍手喝采がおこった。その人物こそ、11才の少年、ダン・ベアードなのだ――と。

彼は天性のデザイナーであり画家だったわけ―。

私は、1929年バークンヘッドでの、第3回世界ジャンボリーで、1人の、ひょうかんな、たくましいリーダーが目の前を、すたすたとあるいているのをみとめた。年令は40才ぐらいにみえた。すると、かん高い子どもの声で「アンクルベアードだ」「ダンベアードだ」とひびいたかと思うと、あちこちから、スカウトたちがとんできてその男に、実に、いうにいえない敬愛の手をふるのに、私は見とれてしまった。あとで年表をしらべるとそのとき、彼は79才だったことになる！

前述したように、シートンは1910～1915年、わずか5年だけでボーイスカウトから去って行ったが、ダンベアードは30年あまりの死ぬまで奉仕した。

ベーデン・パウエルより7年年上であったし、またシートンより10年年上。3人の中ではいちばん兄貴であった。死んだのはベーデン・パウエルと同年。

Daniel Boone というのは、アメリカの開拓史上有名な先駆者である。その Daniel とこのダン・ベアードの Daniel とは血のつながりがあるのか、ないのか私は知らない。だが、彼がつくった団の名前は「ダニエル・ブーンの息子たち」(Sons of Daniel Boone) というのであった。

彼も、やはり、ウッドクラフト仲間であった。動物画家として執筆家として、シートンならびにベーデン・パウエルと共通点がある。ベーデン・パウエルが軍人だったという点、しかも、観察推理を生命とする騎兵士官だったということを考えなかったなら、この3人は全く同じ類系に属する人物である。

現在、アメリカ連盟がボーイズ・ライフという雑誌を機関誌としているのは、やはり、ダン・ベアードの業績を持続しているものとみてよかろう。

米国に今でも Dan Beard Society (ダン・ベアード協会) というものがある。その会員の人々から、もしダン・ベアードの自叙伝とか伝記について教えていただけたら、と、私はねがっている。

以上で述べたように、ダン・ベアードもやはり、ウッドクラフトを唱えた仲間なのであるが、彼のウッドクラフトが、どのようなものであったのか――について、私は、まだ、研究不足である。そのわけは、彼の書いた著書を1冊も読んでいないからである。たとえば、前記の "American Boys' Book of Camp - lore and Woodcraft" という本でも読んでいるならば、その特長をつかむことができるわけであるが、これを手にする機会に恵まれていないのである。

私は、そういう理由で、本稿の序説にあげた6つの項目の中に、シートンと、ケファートとコーンと、ベーデン・パウエルの名はあげたが、ダン・ベアードの名はあげなかったのである。そして、現在わかっているだけの範囲でダン・ベアードの事蹟、いや、実はその略伝を、中間報告的に記しておくという程度にとどめておく。

ケファート方式

わからない彼の伝記

私は百科全書その他で、ケファートの経歴を追究したが結局わからない。何年に生まれ、何年に死んだのか不明である。アメリカで一生をすごした米国人だということはいえると思う。

ベーデン・パウエルは、何回も米国に行ったので、どこかで1回ぐらいはケファートと会ったろうと想像して、ベーデン・パウエルの本とか、何種類もあるその伝記を、克明にあたってみたが、ひとつも発見されない。ベーデン・パウエルのような人が、ケファートに会っていないとは考えられないので、このことは今後の研究にゆだねたい。もし、読者のなかで、ご存じの方があったら教えていただきたい。

その著書から彼のいうウツドクラフトを探る

前記したように、"Camping" の巻とならべて出版された "Woodcraft" の巻――この本がこの研究の対象となる。

その巻頭で、私は、ケファートの人生の、ほんの一部分を知ることができた。それによると――

彼は1904年から6年までの2カ年、Great Smoky Mountain のコロラド側の小屋に、単独にこもり、住んだという。そこは美しい森林にかこまれる。そこには backwoodsmen と少数の axeman および crack shot の名人が住んでいたという。インディアンもいた。こういう山の中で最初の本を書いたのだそうである。

この本の15ページあたりを読むうちに私は、ケファートのいうウッドクラフトの性格が、だんだんわかってきた。以下にあげる点がそれである――

。ウッドクラフトという学校には卒業というものはない

。Woodcraft may be defined as the art of finding one's way in the wilderness and getting alone well by utilizing Nature's storehouse.

(訳) ウッドクラフトとは、道なき荒野において進路を捜して進み、大自然という宝庫によって、ひとりぼっちでも無事に暮らしてゆける技術である、と定義づけてよかろう

。われわれが、難路であり、かつ、未知の国の旅をまちがいなくしたときこそ、ウッドクラフトというものが、いちばんよく自分を教えてくれるということだ。

。だから、ウッドクラフトとは、ワイルドクラフトである。(Woodcraft is Wildcraft)

以上でわかるように、ケファートのウッドクラフトは、道に迷ったときに、始まる！

こうした意味で、たいへん実際的である。たぶん、彼は、何回も何回も道に迷った経験から、ひとつの技術、すなわち、ウッドクラフトを身につけたのだろうと想像される。

25ページには、次の文章がある。これは、このことを傍証する一文であろう。

What to DO――
No matter where, or in what circumstances, you may be, the moment you realize that you have lost your bearings, there is just one thing for you to do: STOP! Then sit down, Then, if you are a smoker, light your pipe ; if not, chew a twig,

(訳文)
何をするか――
どんな場所であろうと、どんな事情からであろうとを問わず、あなたが方角の判断を失ったと気づいたとき、たったひとつだけすべきことがある。停止！することだ。そして、腰をおろして落ちつくのだ。それから、あなたがタバコのみであるならばパイプに火をつける。タバコのみでないならば、細い小枝をかんでしゃぶりなさい

白状すると私は、この教訓に感謝した経験がたくさんあった。はじめは、タバコをのむための口実にこのことばを悪用していたが、ある夏、丹波の山々にとりかこまれた山道で、目にモノを見せられた。また朝鮮半島の中央山脈に近い忠北の暗夜の山越えのとき、まざまざと、知らされたことがある。シニアやローバーが、単独ハイクを1回でもした経験があるならば、このケファートのことばは、一生わすれられない金言となるであろう。

そんなときに、無理やりに猛進すると、必ず遭難するものだ。気が転倒している。いわゆる恐慌パニックに陥っている。そこでケファートは――

But if you don't soon find that back track of yours, and if no familiar landmark shows up before the Sun is within an hour of setting QUIT. It for the day.

(訳) けれども、その場からひきかえす道がなかなかわからなかったり、または、あれかと気づくような地標が、日没前1時間以内に見つからなかったならもうそれ以上動いてはいけない。その日の行動はこれでうちどめだ、と。

ケファートの、この教えも、りっぱである。われわれは、よく、安全教育ということばを口にするが、そのほとんどは、斧の携行法だの、ナイフの用い方だのバイキンの消毒ということや、水の鑑別などに関する安全をさしていて、こういう安全を忘れがちになる。

ケファートは、もう、こうなったら、どうして1夜の安眠をとるかに、全力をつくすべきである。安眠こそ、あくる日の成功の鍵である、という。

そこで彼は、

水はどうか？

火を作る材料は？

体温を保つための防風をどう作る？

骨を休め、地面からの冷気を防ぐベッドの作り方は？

朝まで夜どおし焚き続ける火のことは？

をとりあげている。

要するに、ケファートのウッドクラフトは机上の立論ではなく、彼の経験を体系づけて組みたてたものである。この本のサブタイトルにもあるように Vocation Camper（職業的キャンパー）と Wilderness（荒野）の旅行者のための指導書であるから、スカウト用のウッドクラフトよりも高度であり、科学的であり、専門的であり、そして――技術的である点において、シートンやベーテン・パウエルのウッドクラフトとちがうところがある。

ことに35ページに出ている Circling の項は、彼の体験を詳細に記している。いわゆる Wandering のことである。つまり、広大な地形において、少しばかりの偏向をするならば、やがてその足跡は大円周を描くことになり、場合によっては再び出発点に戻ってくるという例である。

この本の Part Ⅰ と Ⅱ はだいたい以上のような内容である。そして

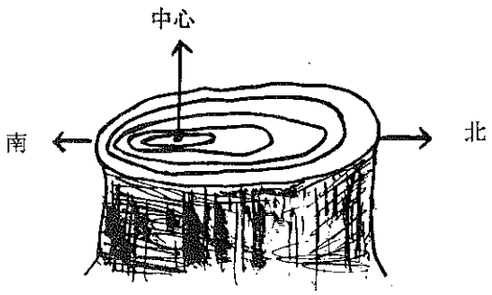
- Part Ⅲは Pathfinding で――
  太陽、星、風、流水、凸出した地標、自然のサインによる進路の発見、方位発見
- Part Ⅳは Nature's Guide Post ――
  林相、樹高の観察、樹の苔、年輪
  ここで年輪による方位判定について1893年に New York の Forest Commission が実地踏査して作った統計が出ている。年輪の径の長いほうが北をさし、短いほうは反対に南をさす、という説、これは500年昔、レオナルド・ダ・ビンチがイタリアから黒海、そして小アジアにぬける旅行中に発見したものだといわれている。

700本の年輪について調査の結果、長径の方向が94%北または東をさし、南または西をさすものはわずかに6%だとしている。すなわち、レオナルド・ダビンチの発見が正しいというのである。

これについて私は、昭和3年ごろ京都で中野忠八先生と一晩中、論じたことがあった。それは陸軍戸山学校発行の兵書に、年輪の中心から広い（長い）ほうは、日あたりがよいのだから南であると図示してあるが、これはケファートの本のと逆である――ということが話題の中心であった。翌日、中野先生は京都大学理学部の植物学科に照会された。するとその答えは、植物は日照よりも水分でよりよく成長するものだから陸軍の本はあやまりだということであった。陸軍ではその後、年輪によって方位の判定をする方法もある――と、改訂しただけで、どちらか北とも南ともいわずに……。

参考のためケファートの本から次の表をあげておこう。

正北	471	正南	1
北東	81	南東	0
東	106	西	27
		南西	6
		北西	8
計	658		42
	94%		6%



この統計は、実業之日本社発行鉄道省著「キャムピングの仕方と其場所」（大正15年初版）の169～170ページにも出ている。　（つづく）

ウッドクラフトとは

――その3――

中村　知

Kephart の Woodcraft はいよいよその特長を発揮してくる。

○ Part Ⅴ は Blazes――Survey Lines ――use of the compass というテーマ。

Blazes とは、樹皮を削って進路のサインをつけることである。これは森林愛護の精神に反することになるからスカウトたちには禁ずるものだがウッドクラフトの専門家はふつうやっている。ただし、樹令の若い樹木はさける。 Survey Lines とは進行方向を見とおすという意味でその方法に幾つもある。Trapper Line, Lumberman's Line, Surveyor's Line の3方法をあげている。狩猟者、樵人や運材夫、測量手それぞれのやり方、それに昔からの Old Surveys と新式の Modern Surveys を詳しく述べている。

ここでコンパスの使用法を科学的に説明している。そして Magnetic Variation. Magetic Declinations つまり正比と磁比のちがい、偏差について解説する。それに続いて時計による方位判定、太陽の位置による方位判定、大熊座から北極星の発見法をのべている。

○ Part Ⅵ ――は Route Sketching, Mapping, そして Measuring.（スケッチ、地図書き、測量）

ケファートは、ここで報告書の作成を重視する。そのため方眼紙に略地図を書く方法について詳細に説明する。地標のスケッチ、歩測の仕方、距離読み、目測法、音測法、時刻読み、歩度計、動物の歩度におよぶ。音測については気温による音速の変化について科学的な数値表まであげている。ここでスカウトがやる簡易測量法が出ている。直角の出し方とか川幅の測り方、高さの測り方、水平の出し方など。

○ Part Ⅶ Trip は Apoot と題して旅支度の用具のことにふれている。靴、ポンチョ、夏の用具、食品、炊具、衣類について

○ Part Ⅷ Packs は for Pedestrians と題するが、主として徒歩旅行用テント、ナップザックのこと。そしてそのまとめ方。（Packing）について。

○ Part Ⅸ は How to Walk―― A Hunter's Pack Going Alone―― と題して、歩き方、歩幅、インディアンの荷負いあるき、渇（のどのかわき）の防ぎ方や防寒のこと。登山、秋の携行品について記す

○ Part Ⅹ は Concentrated Food と題して携行食糧特に缶詰などの濃縮食糧を明細にあげ、そのカロリー表までのせている。また、非常食についても記している。

○ Part Ⅺ は ―― Marksmanship in the Wood と題する。これは、森林中で狩りをして食糧にすることをめあてに射撃について記す。ライフル銃の射撃練習である。

○ Part Ⅻ ――は Axmanship ―― Qualities and Utilization of Wood.

つまり、木樵法である。ここで斧の種類、斧の研ぎ方、斧の刃についてその打込み方、そして伐木法として Felling a tree と Boggled Notch と True Notch および Logging Up の図解がある。

これに続いて材質の分析が示されているが、その分

析と分類の専門家的なのにおどろく。すなわちはなはだ硬い木、硬い木、はなはだ軟かい木、はなはだ強い木、強い木、はなはだ硬直（stiff）な木、はなはだ丈夫（tough）な木、丈夫（tough）な木、燃えやすい木、燃えにくい木、割れやすい木、曲げやすい木、弾力性ある木、細工しやすい木、材質のこまかい木、乾燥すれば細工しやすい木、ちぢんだり、曲ったり、ねじれる木、乾燥しにくい木、板にしてよい木、土や水や天候に耐える木材になる木、くさりやすい木、樹脂の多い木、木目のこまかい木、重い木、とても軽い木。——というように数十種の木（または木材）を分類している。これが文字どおりのウッドクラフトか。

○ Part XIII —— は Tomahawk Shelter —— Axman's Camps —— Caches—— Masked Camps と題し、仮小屋式のキャンプの幾つかをあげている。すなわち Lopped Tree Den, Leon —— to, Bark Tilt, Beehive Lodge, Slab Camp, Flame Camp である。

これらは、Camping の範囲にふれるがケファートのいう Camping とは、これらとは別なキャンプ専門家、あるいは職業的キャンパーのする Camping をさしている。

○ Part XIV は Camp-building and Fitting Up と題して、ちょっとみると、キャンプの立て方のようだが実は、キャビン（Log Cabin）の建て方をさしている。つまり丸太小屋のたて方、そして家具の作り方までふくむ。

○ Part XV は Bark Utensils ——Bast Ropes and Twin —— Root and Vine cordage —— Withes and Sprits という長い題で、すべて家具、炊具、雑具の細工。その材料は樹の皮、ロープ、蔓(つる)ふじづる、根っこ、などである。

○ Part XVI —— Knots, Hitches and Lashing 要するに、結索法、縛材法である。あげてあるのは次のとおりである——

Overhand knot, Double Overhand knot.
Eight Figure Thief knot
Granny knot（ばば結） Reaf koot（本結）
Weaver's knot（ひとえつぎ） Double bend
Carrick bend Sapped Overhand knot
Water knot(てぐす) Double Water knot
Surgeon knot(外科) Leader knot
Half hitch Two half hitch（ふた結）
Rolling hitch Fisherman's bend(てぐす)
Black wall hitch Clove hitch（まき）
Magnus hitch Cliet tie
Timber hitch(ねじり) Killick hitch
Ring hitch Lark's Head（ひばり）
Catspaw 以上 27 種。

○ Part XVII —— は Trophies—— Pelts, Buckskin and Rawhide と題す。狩りで得た戦利品すなわち動物の生皮をはいでいろいろの物を作る。革細工もふくむ。剝製（はくせい）におよぶ。

○ Part XVIII は Tanning Skin's——Other Animal Products と題して、生皮のなめし方、獣類の皮で物る作る法、剝製の作り方は実にくわしい。

○ Part XXI は Cave Exploration,
この章は洞穴、洞窟の探険法についてケファートの体験から書いたもの。

○ Part XX は Bee Hunting
これはミツバチ狩り。こういうものも彼はウッドクラフトとしている。そして養蜂におよぶ。

○ Part XXI は Edible Plants of the Wildernessで野生の食用植物について記している。くわしい。

○ Part XXII Living off the Country—Extremis と題する。
へき地での生活法。

○ Part XXIII は Accidents and Emergencies. つまり非常事態、椿事に処する法 Their Back woods Treatment（林中救急）について解説している。

以上で Kephart "Woodcraft" のという 479 ページの本は終わっている。

私は、この本の細目を、いま少し、くわしく紹介したいのであるが、枚数がかさむのでだいぶカットした。これだけ見てもケファートのウッドクラフトは、森林の中に永住する人のための技術のようである。狩りをしたり、食用植物を採集して日常の食糧とし、その獣を剝製（はくせい）にしたり、革細工や木工細工で家具、衣服を作る。すなわち原始生活である。

シートンや、ダン・ベアードのウッドクラフトが、こどものゲームの形でなされているのにくらべると、ケファートのウッドクラフトは、おとなの、しかも山男や日本の山窩（さんか）みたいな特殊生活をする人の生活技術なのである。

このように人里から遠くはなれた別世界の人間だったケファートだから、彼の名は人名辞典に出ていないのかも知れない。

とにかく、ケファートという男は、愉快な人物である。ことによると、文明に対して反骨の意地を貫いた人なのかも知れない。けれども、実際に、この本を手にとってよく見ると、すこぶる科学的である。そういう点で彼は、Woodcraftを科学化した第１人者だともいえる。

コーン方式

これは特にコーン方式と名づけるに値しないかも知れない。スカウト方式だからである。さらにいうならば、こどものゲームとしてのウッドクラフトだからである。つまり、ベーデン・パウエル方式に則ったものだといえよう。いまひとつ、付言するならば、Camping をもふくめた１本建ての部類に属する。

その内容は前述した
"Make and Do the Woodcraft" 1940年初版と
"Woodcraft Wisdom" 1952年初版
の２冊の本によって知ることができる。

"Make and Do the Woodcraft" の内容

○トーテムポールとは
○ウッドクラフトにおける手技
○デンの備品作り
○キャンピングについて
○キャンプの台所
○キャンプでの居住性（たのしいキャンプ）
○キャンプでの調理
○ウッドクラフトのサイン
○ウッドクラフトの絵文字
○ウッドクラフトの走路（トレイル）。足跡と追跡
○ウッドクラフトの大自然の教え（Nature Lore）
以上11章からなる。

トーテムについては、班や隊、連合体の表徴としてのトーテムを作ることにして野牛班、タイシャクシギ班、カワセミ班、キツツキ班……などのトーテムポールのデザインと作り方を図解している。そしてスカウトのスタッフ（団杖）に彫るものと、高い柱状のものとを示している。

手技の部では、トムトム太鼓の作り方、Camp-fire peace pipe（パイプの一種）、リュックサックのフレーム、インディアンの頭飾り、伝令かばん、革製の装飾品（ナイフの鞘袋の）、Moccasin（インディアン靴）、革バンド編み、手製のナイフ、記録帳のカバー原始的な工具の作り方の図解が出ている。

Den の備品の家具づくりの章では、壁の装飾、燭台、(fireplace) 炉、椅子(chair)、卓、机、パトロールコーナーの座席（物入兼用）、書棚、班備品棚、班食器かけ、隊掲示板（革）、聖書台、班旗立て台などの作り方と図解がある。パトロールシステムを重視した工作である。

Camping の章は ——
食料庫、むしかまど（oven）、Hay-box（保温箱、そして蒸す）薪木の組み方、炊事炉いろいろ、摩擦発火法、１人寝ハイクテントの作り方、自分用スペアーテント、テントの通風装置、フライシートのかけ方、テントの修理、ポールの継ぎ目の作り方、ランナーの作り方、ペグの作り方、ポールの荷造り法、テントに描くデザイン、防水加工法、にわたり図解、説明。

Camp Gadgets（キャンプの装置）の部では ——班の皿立て、ローソク台、洗面台、自動開閉台所入口ドアーの作り方、食卓の作り方、流し場の設計、Camp gong（鐘）、日時計、靴置台、食器台、庖丁かけ、枝製フォーク、コップかけ、郵便ポスト、などの作り方（図解）

キャンプの安住性——については、テントの立て方雨に対する措置、Bivvies（仮小屋）作りなどについて。

Camp Cooking（炊事）の部では Potato Fritters.（馬鈴薯揚げ物）、Sausage Butter と Rissoles（肉まんじゅう）、Scones（１種の Hotcake）の作り方。

ウッドクラフトのサインの部 —— これは、いろいろのサインの絵がのっている。進路サイン、時刻サイン、月を表わすサイン、いろいろの絵文字、それらによる日記文とあってその根源は明らかにインディアンのサインランゲージによると思われる。これは、シートンの畑である。

Woodcraft Trail の部 —— Tracks（足あと）と Tracking（追跡）。これには Tracking Iron（鉄製の足跡をつける道具）について記している。それはスタッフ（杖）の台尻にはめこんで杖をついて地上にサインをつけるもの。足にくっつけてあるくものにわかれ、その図柄が出ている。次に自然物（木の葉、草、木の枝、小石、根など）を利用して地上につけるサインの図解、人間が地上に描くサインの図例がある。

最後の Woodcraft. Nature Lore —— 大自然の教え——ここでは、自然研究、自然観察に中心がおかれ

ている。

第1に Trees（樹木）について外形のスケッチ8種をあげている。実は夏の茂っているものと、冬枯れのもののそれぞれ4種なのである。

第2は鳥。外形とその飛び方、習性、鳴き声などで見わけなさいという。その一例として鳥体各部の名称が図示してある。そして藍色を呈する鳥は Blue Tit と Fay(カケス)、緑色のものは、Green Woodpecker（緑色キツツキ）と Green Finch(ウソ)、白いのは Chaffinch(ヒワ)、と Bullfinch（ウソの1種)、Pied Wagtail(セキレイの1種)、Lapwing〔=Pewit〕(タゲリ)、黒いのは Starling（ムクドリ）だと記し、それぞれ鳴き声を示している。茶色のものには Missel-thrush（ツグミ)、Linnet（ベニヒワ)、Skylark（ヒバリ)、Wren(ミソサザエ)、Curlew（タイシャクシギ）。

第3に、獣類で Stoat（テン） Weasel（イタチ)、Badger(アナグマ)、 Squirrel(リス)、Otter（カワウソ）Water Vare（?） Fox（キツネ） その他2種の絵がある。

第4として星のこと。大熊座、小熊座、オリオン座それに白馬座の図解と、北半球での8月の星座配置の図が出ている。

第5として気象の知識が簡単に記してある。雲のスケッチ4種を伴う。

以上でこの本は終りである。

"Woodcraft Wisdon" のほうは、あとから出版されたもので、たぶん前本の補遺だろうと思われる。内容は——

○ウッドクラフト
○デンのこと
○ウッドクラフト・トロフィー
○キャンピングの安住性
○シャックとシェルターの建て方
○キャンプ用品
○営火用衣裳
○自然研究
○スケッチ
○サインとシンボル
○キャンプファイアの歌
○結語

と、いうもので、前の本と重複する部分が多い。補充したと思われるものは巣箱の作り方、鳥類観察用の忍び小屋の作り方、スケッチの仕方、その図例、方眼によるスケッチ、透視画法、キャンプ用の笛の作り方金属パイプで作る打楽器、空びんをならべた打楽器の作り方などである。

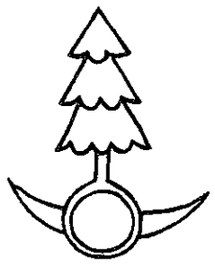
けれども私は、この本の巻頭の Woodcraft と題する序論と、巻末の結語に注目した。著者 J. G. Cone の説を追究したいからである。

まず彼は、世の中のことは昔と今と変わっているから、昔はこうであったというような話をするのはばかげている。賢しい人ならそんなことはいわないだろう。けれども、ウッドクラフトというものは今も昔も変わっていない。なぜか？ それは、大自然というものが変わらないからだ——と、なかなか、うまいことをいっている。木にしろ、花にしろ鳥にしろ、獣類にしろ、風も雨も、40年昔と同じである——と。この文章によると著者コーンは、40年前からスカウティングをしている人だろうと思う。

その次に彼は、ウッドクラフトというものは、ボーイスカウトが始まる前からあった。それは追跡、忍び寄り、観察、開拓、自然研究などの作業をさす、と。

1906年、7年のころ自分はヤナギの枝で弓をこしらえ、ハシバミの枝で矢を作って、インディアンごっこをしたことを思います。「あれがロッキー山脈だぞ」と勝手な想像をして襲撃ごっこをした。これこそスカウティング以前のスカウティングなのだ——という。木に登ったり、キャンプファイアを焚いたり、鳥の卵をしらべたりした。それがウッドクラフトなのである——ともいう。

ベーデン・パウエルが "Scouting for Boys" という本を書いてくれたので、われわれは勝手に狼班をつくった……。冒険もやった。そして神が創造し給うた大自然を知るようになった。これは忘れてならないことである。これは最後において宇宙は1つで、永遠無窮そこに大きな一体感を教え、全世界にわたるスカウト兄弟心を感得する——と結んでいる。そして次のような標識を示している。



結語のところでは——

いろいろとたくさんのことを述べてきたが、これでおしまいではない。ウッドクラフトには終点はない。だから記録をつけることがたいせつだ。ますます、この道に励んでほしい。本書がその案内書となればうれしい。平和でスムーズな trail を祈る。

と、いうような意味を書いて終わっている。

著者、J. G. Cone の経歴は、この本ではわからない。ただ、本のカバーの裏面に短かい紹介文があってそれによると Cone は "Eagleye"（ワシの眼）というニックネームをもつ男で、多年、スカウト雑誌に筆をとり好評を博した人である。実技も達者だ、と、ある。

この本はロンドンのアーサーピアーソン社の発行であるから、イギリスの相当ベテランなスカウターだろうと思われる。

毎ページ、挿絵がのっている。この人も絵がうまい人かも知れない。スカウトが、とびつきそうな本である。

（つづく）

（日本連盟嘱託）

ウッドクラフトとは

―― その 4 ――

中　村　　知

ベーデン・パウエル方式

ここで、私は、ベーデン・パウエルが、1907年にスカウティングと名づける新しい運動を起こすにあたって、この、ウッドクラフトというものをどう扱おうとしたか、これを採用するとするならば、その年代以前からすでに存在していたウッドクラフトの先輩、たとえばシートンだの、ダン・ベアードだの、ケファートなどのそれと関係なしに、彼独自のもので組み立てたのか、それとも、先輩たちのものを交渉の結果、採用したのかどうか、そして、その採用は、どの程度の採用であったのか、等々の研究をしてみたい、という考えをもったのである。そうした研究のあとで、ベーデン・パウエル方式の特色を、割り出すことが科学的であり正しいのではあるまいか、というねらいをつけたのである。つまり私の独断を恐れたわけである。私は自分が京都大学の史学科で学んだときの史学研究法、すなわち、考証学派の手法を採用するのがよいと判断したしだいである。

この点で、私は、レイノルズ著「スカウト運動史」(Reynolds : "The Scout Movement")を有力な史料とした。そして同書の第2章、最初の立案のⅡ、ボーイスカウト、計画の要約――のところを、丹念に読んだ（本誌、35年5月号13ページに訳出してあるから参照されたい)。次の訳文を引用しておこう。

……要するに、戦争スカウトであろうと、平和スカウトであろうと次の資質がなくてはならないのである。

ウッドクラフト　すなわち、野外で生活し、自分で屠殺して料理し、あるいは未知の土地で道を発見し自分の健康を自分で管理し、動物の通り道をよく知りそれに豊富な一般的機略や独立独行の精神を持つような能力である。

観察力　は、注意したなら何物も見逃さないほどに発展さすべきである。彼らは足跡やほんのちょっとしたしるしを判断して追跡し、その意味を読みとることができるにちがいない。

以上のように、ベーデン・パウエルは、ウッドクラフトと観察力、判断力とを、スカウトの資質の第1と第2とにあげていることに注目せねばならない。これに次いで、任務に対する忠誠、騎士道、勇気と忍耐力の三つをあげている。彼が、いかに、ウッドクラフトおよびそれに伴う観察訓練を、重要視して、それをスカウト資質の第1と第2にあげたかに、注目しなければならない。

私は、ここで、"Scouting for Boys"の現代版と、初版のそれとの比較対照をしてみたいと思う。

現代版の「営火夜話その1」では、

平和の斥候
キム
メーフキングの少年兵

「営火夜話その2」は、

スカウト訓育コースの概要
ビー・プリペアード
ウッドクラフト
キャンペイニング（出動）
騎士道
人命救助
忍耐力
愛国心
英国旗の由来
ウインター事件（ウッドクラフト――騎士道――勇気、忍耐、敏捷、健康の力、暖かい心、人命救助、使命）

という順になっている。

1908年の初版本は――

営火夜話その1
　メーフキングの少年斥候
　スカウトの仕事
　キム
営火夜話その2
　スカウト訓練コースの要約と教え子
　ウッドクラフト
　キャンペイニング
　騎士道
　忍耐力
　愛国心、英国旗
　ウインター事件（ウッドクラフト、観察、推理、使命感、忍耐力、暖かい心）

となっていて、順序に少々のちがいがあるが、ウッドクラフトを第1に、観察、推理を第2にあげた点はちがわない。やはり前掲の立案の方針によっているのである。

そうであるならば、このウッドクラフトの説明や指導法を、どのあたりで述べているのかについて、私は同書の目次を注意してみた。

現行版（ただし、私のは1952年版）によると――

営火夜話その5に
　進路発見（Finding the Way）
　気象知識（Weather Wisdom）
　北の発見（Finding North）
営火夜話その7
　信号と命令（Signales and Command）
営火夜話その8に
　開拓術（Pioneering）
営火夜話その9に
　野営法（Camping）

（コーンの本にのっているウッドクラフトのマーク）

営火夜話その10に
　野営調理法
そして――
営火夜話その11になって
　サインの観察
営火夜話その12に
　追跡
営火夜話その13に
　サインの解説法と推理
営火夜話その14に
　忍び寄り
営火夜話その15に
　動物（獣、鳥、爬虫類、魚、昆虫）
営火夜話その16に
　植物

という順序で、ウッドクラフトとそれに関連する諸細目をあげている。

しかるに、1908年の初版本では――

夜話5　で　サインの観察
夜話6　に　追跡
夜話7　に　サインの解読と推理
夜話8　は　忍び寄り
夜話9　は　動物
夜話10　は　植物
夜話11　が　開拓術
夜話12　が　野営法
夜話13　が　野営調理
夜話14　は　戸外生活（Life in the Open）
夜話15　は　進路発見（Pathfinding）
夜話16　は　通信、信号

という順序になっている。ウッドクラフト関係のものは早目に出ているのだ。この新旧の対照は、私に、いろいろのことを暗示してくれた。

日本語版「スカウティング・フォア・ボーイズ」の巻頭に、Lord Rowallan（前総長）の緒言がのっていて――

……その原稿はいろいろの種類の紙に書かれ、そし

て何回にも、また方々の土地で書かれたことが明らかである。いちばん最初の日付がついている部分は「追跡」(Tracking)の夜話の部分で、ノートペーパーの1ページに書かれていて……(後略)」

とある。(訳本11ページ参照)

この Tracking というのは、初版本の第2章の題目で夜話 5、6、7 の総称である。

次の第3章が Woodcraft と題し、夜話 8、9、10 でここまでが第2分冊である。そして夜話11から16までが第3分冊になっている。

以上の分析から私は、ベーデン・パウエルのウッドクラフトは、追跡から始まったこと、そしてそれが同時にスカウティングにおいても、出発点であったことを確認したのである。

シートンとダン・ベアードの2人は、画家として出発し、野生動物に愛情を感じたことが、ウッドクラフトへの導きとなり、ケファートは、道に迷い、荒野で暮らす生活の必要からウッドクラフトに入門したものと考える。そういうちがいからみると、ベーデン・パウエルの出発点は、ゴタルミンでの少年時代の経験が出発点であり、後年騎兵将校となってその職掌とする観察、推理で根をはったと、私は考える。

すなわち彼のウッドクラフトは、軍人になってからの入門ではなかった。すでに少年時代にそのスタートがきられ、ことにチャーターハウス校が、ロンドン郊外ゴタルミンのいなかに移転してからの環境が、その実習場を彼に与えていたのである。彼が騎兵士官になった動機は、英国がインドを領有し、東洋およびアフリカに発展の結果、海外領土に行く軍人を求めていたという時運にかられたという運命論からもくるだろうが、すきでたまらなかったウッドクラフトを続けたいという若者らしい冒険心(挑み)がそうさせたようにも考えられる。

そこで私は、この少年時代にスタートした彼のウッドクラフトが、どのような成長・発展・展開をしたかというテーマを設定して、これを追跡してみたいと思う。まず第1に、彼のウッドクラフトは、彼自身の実践から発した、ということ。すなわち、他人のマネをしたのではないということである。ただし、そうなるについては、他からの影響が全然ないわけではなかった。彼の母は「行なうことによって学ぶ」(Learning by Doing)という新しい教育法をとったし、自然の観察を大いに奨励した。私は、この教育思想はたぶんに「エミール」の著者、ジャン・ジャック・ルソーの影響だと考える。そのことについてここで詳細に立証するページはないが、「ルソーは疑いもなく19世紀の、イギリスの教育、とくに幼年期の教育に影響をあたえた」とは、W・O・レスタースミス著「教育学入門」(周郷博訳、岩波新書本の52ページ)にあり、同書は「ルソーの影響」と題して49〜59ページ(訳本の)にわたって詳説している。これを読むならば、ルソーの教育思潮は、ロバート・オーエンにつながり、ペスタロッチやヘルベルトやフレーベルにつながり、モンテッソリー、そしてデューイにつながるという。私は、ベーデン・パウエルにもつながったと思考するのである。

私が、なぜ、このような立論をするかといえば、さきのシートンやダン・ベアードや、ケファートのウッドクラフトは、教育というほどのものではなかったがベーデン・パウエルのウッドクラフトは、それが「教育」活動に展開されたので、一応、教育史の上での位置づけをしたいと思いたったためである。

換言すれば Scouting という新しい教育活動にふ化したのだ。Scouting という成虫からみれば、その幼虫が Woodcraft なのである。すなわち、ベーデン・パウエルのウッドクラフトは、ウッドクラフトのままでおしまいになるウッドクラフトではなく、スカウティングに伸びる要素としてのウッドクラフトである、ということになる。そういう点で、シートンなどとは異質だといえる。

ただし、シートンはボーイスカウトと一時は合流したが結局、元来の古巣にもどった。ダン・ベアードは、とにかくスカウティングを受け入れていっしょにはなったが、あるいは、寄生していたのかもしれない。

ここで私は、ベーデン・パウエルとシートンとの、出会いについて永年、知りたかったのであるが、それが、やっと、わかるようになった。そのことは——、レイノルズの「スカウト運動史(Reynolds: "The Scout Movement")」と、ヒルコートおよび、レディ・ベーデン・パウエル共著の「ベーデン・パウエル(William Hillcourt with Olave, Lady Baden-Powell: "Baden-Powell")」によって判明した。

まず、レイノルズの本(原書の 7〜8、32、72、102 ページ)を見る。

○1906年10月、彼(ベーデン・パウエル)は、米国で Woodcraft Indian 団を創始した Ernest Tompson Seton に会った。その場で彼は自分が今まで考えてきたいかなるものよりかも、自分の考えに近い体系を発見することができた。ベーデン・パウエルの日誌の覚え書には次のように書いてある——

10月30日、トムソン・シートンと昼食。氏は、レッドインディアン・ボーイズ(団)の体系についてすべてを語ってくれた。(以下省略、これは本誌昭和35年5月号の11ページに出ているから——)

○シートンの方式は、北米インディアンの技術をもとにしたというよりも、むしろ彼シートンの空想(その風習、習慣についての)のほうが大きい。そのころ Catlin の書いた "North American Indian" という本は、少年たちに好評であったから自分も読んだが、それはシートンの考えているインディアンよりも正しいものであった。

○ベーデン・パウエルは、そのような原始民族については、南西アフリカにおいても実見してきたので、その長所は認めるがそれには限界がある。少年たちが見習うような模範的人間とは考えたくない。

○もし、それが少年の興味をひいたとしても、少年というものは飽きやすいから、持続性があるとはいえない。それよりも辺境生活者、探検家、開拓者の属性に焦点をあわしたほうが発展性がある。

レイノルズは、ここで、ベーデン・パウエルの卓見をほめたたえている。もし、彼が、シートンみたいなことをしていたなら、教育活動に発展しないだろうし時代とともに滅びてしまっただろう、といっている。私はこのレイノルズの史的着眼に対して敬意を払いたい。

Hillcourt の本には 255〜7 と、270、282、306 ページにシートンのことが出ている。略記すると——

○1906年の7月下旬、小さい本が郵送された。本の名は "The Birch-bark Roll of Woodcraft Indians" という。著者は米国在住の英人 Ernest Tompson Seton である。

○ベーデン・パウエルは返事を書いた。「私も、あなたのように、少年たちのため、スカウトという名の教育法について本を書こうとしていることを申しあげたら、さぞあなたは、興味をもたれるだろうと思います。あなたのお仕事が、私に特別な興味を与えたことは申しあげるまでもありませんので」と。

○10月30日、46才の博物学者と49才の将軍とは昼食をともにした。場所は Savoy Hotel。シートンは盛んにインディアンごっこについて語った。彼が本を送ったのは、英国においてインディアンごっこを始めてもらいたいため各方面の知名の人に送ったもので、そのひとつがベーデン・パウエルの家についたわけ。しかし、そんなものが英国の少年たちの興味をひくかどうかについては疑問がある。

○その後、ベーデン・パウエルは、シートンに、自著 "Aids to Scouting" を送った。それとともに、近日起草しようとしている "Scouting for Boys" の資料を送った。それに手紙も出した。

○手紙には、これによって私案の大要がおわかりと思う。けれども私は、新規の組織を作ろうとは思っていない。既設の青少年団体が利用してくれればそれでよろしい。もし、私にご協力くださるならば幸甚です。われわれは前途有望ですね、と。

○その後、2人は再会につとめたが多忙のため果たさず手紙のやりとりだけは続けた。シートンの考えたゲームを用いる許可を得た。シートンのほうは、ベーデン・パウエルの援助によって野営法の部分を改訂した。

○1907年のブラウンシー島での実験キャンプで、実施した「鯨とり」のゲームは、シートン作のものであった。

○ボーイスカウトの技能章制度は、シートン方式の、Honour 章にならった。(ヒルコート本282ページ)(本稿のシートン方式のところを参照されたい)

余談になるが、10月30日という日は、ベーデン・パウエルにとって因縁の深い日付である。

○1876年10月30日は、彼が19才で、初めて陸軍士官の軍服で、汽船セラピス号に乗って、初めてのインドへの旅にポウツマウス港を立った日。

○同年同月同日——つまりこの日、ビクトリア女皇はインド皇帝の称号を名のった。そのインドに向けて彼は人生の門出をふみ出したのである。

○1906年の10月30日、シートンと会見す。(前述の)

○1912年10月30日、55才にして23才の Olave Soames と結婚。

○1913年10月30日、長男 Peter 生まる。

Peter は後、結婚したがその夫人も10月30日生。

かように、シートンとは、会食したり、意見を交換したり、手紙をもってやりとりしたけれども、ダン・ベアードとの交渉については、何もなかったようで、その証拠となるような文献は見あたらない。

——つづく——

(日本連盟嘱託)

ウッドクラフトとは

―― その 5（終稿）――

中　村　　知

前回のところで、ベーデン・パウエルと、トムソン・シートンとの関連の１部、すなわち、最初の出会いについて書いたのであるが、シートン方式のインディアンごっこを土台とするウッドクラフトを、スカウティングにおいて、どのように考え、どのような措置に出たかは、1907年から1919年にいたる12年あまりの長いあいだ懸案だったようである。

そのひとつの問題は、シートンの弟子のジョン・ハーグレイブ（John Hargrave）という人が、英国においてインディアンごっこをやり始めたことからおきるのである。

これについて、レイノルズ著「スカウト運動史」の第 16 章「ウッドクラフトと訓練」（Woodcraft and Training）に詳細に書かれている。その訳文は本誌37年４月号の22～24ページと、５月号22～25ページに出ているから参照してほしい。私は、本誌のバックナンバーを持っていない読者のため、ここに、かいつまんで記したいと思う。このレイノルズの文は、まことに重要な文献である。したがって、私の結論への糸口になるからでもある――。

問題の人物、ジョン・ハーグレイブは、自然観察と野営訓練担当のコミッショナー（英国では理事）に新任されると、さっそく、「ウッドクラフトとキャンピング」と題する本を書いた。彼のいうウッドクラフトとは、シートン著の "The Book of Woodcraft" および "Birch-bark Roll" から多くの示唆をうけたものであった。それは前述したように彼はシートンの弟子だからである。この本は、少年たちを喜ばせ、戸外活動をすすめた。ときあたかも第１次世界大戦直後だったことが、戦時中の反動として野外活動をもりあげたともいえよう。

ところがこのシートン方式に対して反対論が出た。それは、英国ではいくらさがしても、炊事具を作るだけの大きさのカバの木なんかない――など。けれどもこれとは逆に、少年たちには好評で、ロンドンのある隊では、営火に美しいインディアンスタイルであらわれたり、雷鳥とか鷹の眼と名づける称号を授けるテストをしている隊があらわれた。彼ら少年たちは、ウッドクラフトとは、インディアンごっこなのだと解釈したらしい。

こういう傾向は、セレモニーのやり方にも波及してインディアン式のセレモニーになりかけた。これはベーデン・パウエルの構想の土台である騎士のセレモニーと異質である。そのころ、生まれかけたローバー部門の叙任式はナイトの方式を採用する考えだったからこの問題は深刻となった。

インディアンごっこの熱狂者たちは、わけのわからない多神教をもち出した。これはスカウト運動を援助しているキリスト教会（一神教）からも抗議が出た。結局、シートンの考え方は、せますぎるということであった。

そうであるとするならば、一時的の熱狂によって流行しても、しだいにあきてながつづきしなくなるだろう、という結論に達した。けれども、ある限度、限界までならよろしい。しかし、限度をこえるならば、むしろ有害だともいわれた。これに対してハーグレイブ一派は逆襲してきた。彼はついに、ボーイスカウトから脱退してキッボ・キフト（Kibbo Kift）と名づける別の団体をつくった。

1920年、ベーデン・パウエルは、この、インディアンごっこ（原文は Red Indianism）について声明文を書いた。その要点を分析してみると――

○自分は、真のスカウティングの重要な活動（作業）としてウッドクラフトの必要性を説いてきた。

○したがって、インディアンの衣裳をつけたり、羽根をつけたりすることも、ウッドクラフトを説明するため、よいと思って採用させたこともある。けれども、それは私のまちがいだった。

○とはいえ、私はレッド・インディアンに悪意はもってはいない。いい点は、やはり、いいのだ。美しい衣裳、ロマンティックな物語、少年たちの心をひきつける点で、私たちに有益だった。

○私の知るアフリカの兄弟、ズールー族、ハウサ族、それにソマリでも、アラブでも、みな有益だった。

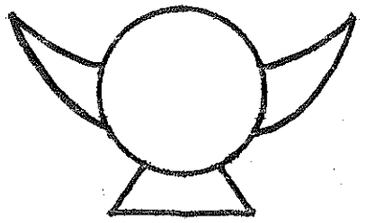
○けれども、ウッドクラフトとは、原始的の一つの種族もしくはいくつかの種族がやっている技術に、表面的にひきつけられたり、その模倣をすることではなく、実は、もっと、はるかに深い意義があるものと、私は思う。

（原文）　But woodcraft goes a great deal deeper than the surface attraction or imitation of one or other of the more primitive tribes of men……

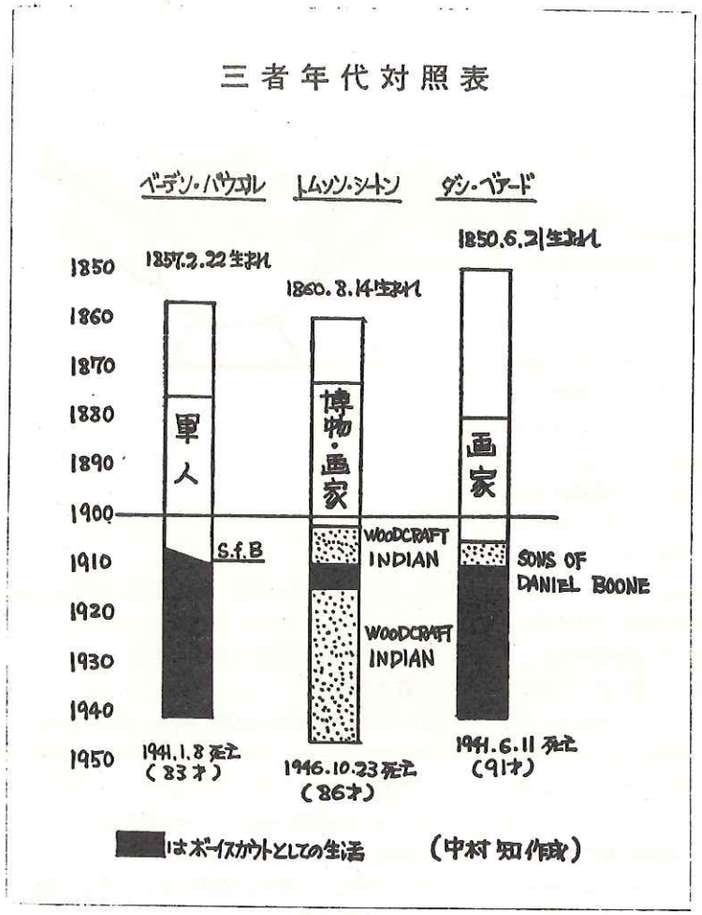
この、ことばは、ウッドクラフトということについて、ひとつの解釈をくだしたものとして、歴史的なものだったといえる――と、レイノルズはいう。

この解釈が、実行に移されたのが、第１期ウッドバッジコース（1919年開設）である。そのときの日課は――、

1. 隊――入所式、班の編成、班コール協定、団杖使用のドリル、エンゴンヤマコーラス、班行進隊形、スカウトペース、叙任式、国旗掲揚法、Scouting for Boys 所載の６種の体操
2. 野営法――
   ① キャンプサイトの選定、保健、テントの張り方、テントの種類
   ② 野営管理――照明、炊具、寝床、健康管理、清潔整とん、その他
   ③ 野営炊事――分量、使用器具、火作り、かまど
   ④ 救急――救急箱、衛生材料等
3. 野外作業
   ① 計測――体測、距離、高さ、面積、川幅
   ② 地図――パノラマ地図のかきかた、スケッチ地図、プリズマチックコンパス、レポート
   ③ 星――識別、時刻、方位、夜行進
4. 開拓作業
   ① 木樵法――伐木、鋸横びき、くさび、砥石、ナイフ手入れ
   ② 構築――ロープ架橋、木材架橋、起重機、小屋、リンツー
5. ゲーム
6. ウッドクラフト
   ① 観察と推理――自然観察ノート、その他
   ② 鳥と動物――せい息地、習性、用途、自然博物館訪問
   ③ 樹木――識別法、興味を起こさせる方法
   ④ 草木――食用、薬用、毒草
   ⑤ ウッドクラフトを通じてのたましいの展開性の問題、神を認む
7. サインクラフト（Signcraft）
   ① 信号――手、笛、発煙、手旗、モールス、陥りやすい誤り
   ② 道標となる自然物
   ③ 砂の上の足あと
   ④ 気象についての伝承（知識）――雲の変化、



シートンのウッドクラフトのしるし



兆候、手製の観測器具

8. 進路発見（Pathfinding）

エピングの森の中を、班ごとに10時間、秘密命令により旅行する。木の葉採集、レポート作成、見取図、パノラマ式スケッチ等。

なぜ、このような表を私はここにあげたか？　私はこれによって、ベーデン・パウエルのいうところのウッドクラフトということば（内容）が、この表によって、定着されたということ、それがなんであるかということ、そして、スカウティング全体の、どの部分にどれくらいのウエイトをもって位置づけされたか――――などを判断するための目やすとしたいがためである。一見してこれは、指導者コースの日程表にすぎぬではないかともいえるが、ひとつの目やすにはなると思う。

この表の6の⑤――に

ウッドクラフトを通じてのたましいの展開、性の問題、神を認めること、（Soul development through woodcraft,sex questions, realization of God.）

とあるのに注目したい。

これは、ウッドクラフトというものの解釈に対するひとつの大きな見解の飛躍（ただし、よい意味での）であると私は思う。そしてそこに、ベーデン・パウエルの特長と、発見とを仰ぎ見たいのである。このことは、ローバーリングという新しい形のスカウティングが生まれようとしていた1920年の、展開作用と密接に結びつく成長ぶりだと私は分析する。そのつながりは、1922年初版を出した“Rovering to Success”にあらわれている。

“Rovering to success”において、ベーデン・パウエルは Rover とは Open air と Service をするところの Brotherhood であると定義づけている。これは英国連盟規約の254条に

Rover Scouting is a brotherhood of the open air and service.

と規定されているほどである。

私は、昨年“Rovering to Success”の翻訳と「英国ローバーの研究」執筆に熱中した結果、この意味がやっとわかった気がする。この Open air とは戸外活動であるが、いいかえればウッドクラフト（キャンピング、ハイキング、エクスプローリング、クルージング（巡航）、登山、洞窟（どうくつ）探検をふくめた）のことである。そして、ローバーの段階ではこれを通して、自然の美と驚異を感得させ、そこから神の恵みを発見することを期待している。なぜ、神を見い出すことが必要条件なのか？　それは真の奉仕（Service）は信仰の発露であるからである。奉仕には、道徳的

（道徳を基盤とした）奉仕もありうる。けれどもその程度の奉仕は、カブと、少年スカウトの段階である。シニアー、ローバーの奉仕はもっと高い次元、すなわち信仰心に発するものでなかったら、本物とはいえないと思う。

このことは、“Rovering to Success”を丹念に読んでゆくうちに読者にわかってこよう。

この本の「第5の暗礁」「無宗教――Irreligion」のところで、ウッドクラフトを通じての信仰入門が書かれている。

また同書の「第3の暗礁」「女――Women」のところに、性教育について説いているが、それもやはり、ウッドクラフトによる生物観察と結びついている。

以上を総合しての私の所見は、ベーデン・パウエルが少年時代からやってきたウッドクラフトは、彼の軍人生活の斥候術に役だち、その観察推理という心身活動の機能は、少年むきの新しい教育法といわれるスカウティングを生む。ここにおいて少年時代からの彼のウッドクラフトは、第4段目の展開をして神の発見、そして奉仕というローバーリングを生んだ、と私は考える。

そういう、神のチームの仲間、Brotherhood は単に英国にだけでなく、世界中いたるところのローバーとも仲間である――というユニバーサル（平等無差別）なもの、すなわち、世界的な展開を成功させた――と考える。

そのことは、ベーデン・パウエルその人が、成長しその人生を展開するとともに、次々と、彼のウッドクラフトもまた展開したということである。

現代的にいえば、第1段ロケットが少年時代のウッドクラフト、第2段ロケットが騎兵の斥候時代、第3段ロケットがスカウティングの出現、第4段のロケットが、ローバーリングの誕生ということになる。この段階で感受する大自然の美と驚異というものが、奉仕というものとドッキングするとき、その教育衛星は地球のまわりを永久にまわって、地上の青少年に電波を送る――のだ!!

そこで、少年スカウトは、ベーデン・パウエルが少年時代やったように、サインの追跡、スカウトペース忍び寄り……結索……で2級となり、そして地図方位計測、開拓、炊事、野営、旅行などで1級になる。カブのピクニックは Open air の卵であろう。

これら細目の配分は、ベーデン・パウエルが年少少年→年長→青年と成長したときの経験が、たぶん、その基調となったのではなかろうか……。

私は、ウッドクラフトを、ウッドクラフトだけに終わらせなかったベーデン・パウエルのえらさに感嘆する。それに比して、シートンのインディアンごっこ、ダン・ベアードのダニエル・ブーンごっこは、彼の死後、自然に消えてしまった。それは、きれいで、はでなもので、ロマンチックなものではあったろうが、単にマブタに残るだけで亡霊と化した。シートンの名、ダン・ベアードの名を知らない人がたくさん出てくるのも無理はないといえよう。

ケファートにいたっては、その伝記もわからない。

この稿を終わるにあたり、5回（5カ月）にわたる読者のみなさんに感謝する。ウッドクラフトについて私の研究はこれで完成ではない。ウッドクラフトに終点はない――“Woodcraft is a never ending trail とは、コーン（J. G. Cone）の言である。

私は、この稿を終わるにあたり、ベーデン・パウエルの最後のメッセージを味わいたい。

「自然研究というものは、この世界が、美と驚異とに満ち満ちていることを教えるでしょう。それは神さまが、そういう世界を君たちがたのしむために、贈ってくださったことを示します」

ということばが、メッセージのまん中あたりで、突然出てくる。私は、なぜ、自然研究というようなことばが、突如として出てくるのか、わからなかったが、“Rovering to Success”を翻訳するにおよんで、これはウッドクラフトが、人を幸福にさせる一つの方法であること。そして、その大自然の書いたサインによる「大自然バイブル」の解読ができたら、そこに神の存在とその恵みを見い出すにいたる、という暗示を発見した。そしてその反応として感謝・奉仕の念がおこる。ここに、真の幸福とは、他の人々の幸福をはかってあげること――という、ベーデン・パウエル独特の幸福論になっていることがわかったのである。

ベーデン・パウエルのほんとうのスタートは神への探求に発したらしい。

私は稿を改めて、日本連盟規約第14条とウッドクラフトとの関連を、研究テーマにとりあげたいと考えている。

（日本連盟嘱託）